



2018年10月
ご自由にお持ちください

クロニクル2013~2017
展示・イベントで
ふり返る5年間

[特集]

奥村泰宏・常盤とよ子写真展

戦後横浜に生きる

[展示余話]

鶴見の鉄道

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第31号 2018(平成30)年10月6日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通 12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
題字/高橋健介 印刷/製本/株式会社佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内



開館15周年記念企画展 奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる

1945(昭和20)年8月の敗戦後、横浜は都心部を中心に各所を占領軍に接収され、数万の兵士が駐留する基地の街となりました。この時期の横浜市内を数多く撮影したのが、奥村泰宏氏と常盤とよ子氏夫妻です。本年、常盤氏の姪にあたる栗林阿裕子氏を通じ、奥村・常盤両氏が撮影した多くの写真と関連資料が当館に寄贈されました。本企画展ではこれを記念し、奥村・常盤両氏の写真とともに関連する歴史資料も展示し、戦後横浜の様々なテーマについて紹介をします。

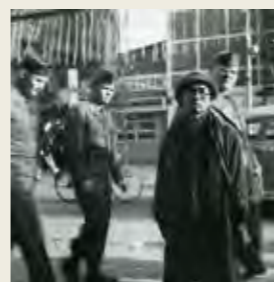
【会期】2018(平成30)年10月6日(土)~12月24日(月)

【関連展示】1階ギャラリー展
「聖母愛児園分園『ファチマの聖母少年の町』の記録」
2018年10月6日(土)~12月24日(月) ※観覧無料
【図録】「奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる」
横浜都市発展記念館/編

寄贈・寄託資料の紹介

平成30年4月より8月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
東海道新幹線等関係資料(一括)	23	小松富一
横浜復興博覧会記念のコピーカップ	1	秋吉誠二郎
日本貿易博覧会記念切手シート	3	秋吉誠二郎
細谷鉄男家資料	44	細谷鉄男
(写真)横浜港(大正期)	1	辻真千子
横浜市電乗務員腕章(布)、他	15	内海純一
聖母愛児園・ファチマの聖母少年の町関係資料(一括)	19	宮寺信良
奥村泰宏・常盤とよ子氏関係資料(一括)	2,946	栗林阿裕子



●表紙写真
帰還兵とGI
1950(昭和25)年 奥村泰宏氏撮影

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

『伸びる鉄道、広がる道路 横浜をめぐる交通網』①

横浜都市発展記念館/編 定価1,500円+税

『ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生』②

横浜都市発展記念館/編 定価1,000円+税

『ようこそ!横浜地図ワールドへ』③

横浜都市発展記念館/編 定価1,600円+税

『目で見る「都市横浜」のあゆみ』

横浜都市発展記念館/編 定価1,239円+税

DVD

『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ

定価各1,429円+税

第1巻・港とまちづくり

第2巻・都市の交通

第3巻・子どもたち



① 伸びる鉄道、広がる道路



② ウォーターフロント・シティ横浜
みなとみらいの誕生



③ ようこそ!横浜地図ワールドへ

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分~午後5時

11月3日(土)、12月22日(金)は午後7時まで
(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか

(月曜日が祝休日の場合は開館、翌日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間

企画展 一般300円 小・中学生150円

(企画展の入館券で常設展もご覧いただけます。)

常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

それ以外の期間

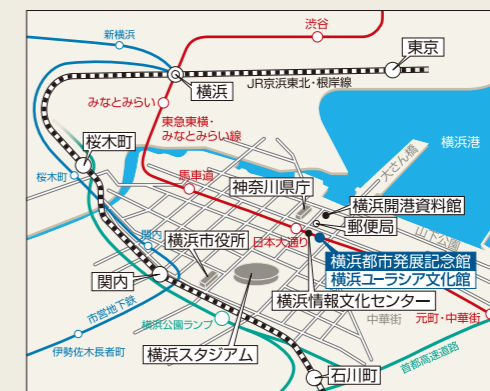
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

●毎週土曜日は小・中・高校生無料

●「濱ともカード」「障がい者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」
などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅東口」下車徒歩1分
- あかいつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでも
ご覧いただけます。



編集後記

今年は当館の開館15周年にあたり
ます。本誌は創刊から31号を重ね、
また現在開催中の企画展は通算で
29番目になります。引き続きまして
今後ともどうぞよろしく願い申し
上げます。(岡)

◎次号発行予定 2019年7月頃



CHRONICLE クロニクル 2013~2017 展示・イベントでふり返る5年間

早いもので、2003(平成15)年3月15日のオープンから、当館は今年で開館15周年を迎えました。開館10周年で発行した本誌19号(2013年3月)では、「クロニクル2008~2012」と題して、開館5周年から10周年までの展示とイベントをふり返りましたが、本号ではその後の5年間のあゆみを紹介します。

2013年

2013年2月2日(土)~4月7日(日) 開館10周年記念 特別展 「ベースボール・シティ横浜 —ハマと野球の昭和史—」



開館10周年にあたる2013年は、横浜における野球の歴史を振りかえる特別展「ベースボール・シティ横浜」で幕を開けました。関連イベントでは、横浜DeNAベイスターズの協力をいただき、横浜スタジアム&ミュージアム見学ツアーを実施したほか、1998(平成10)年のベイスターズ優勝メンバーである鈴木尚典元選手をお招きして、優勝時の秘話などたっぷりとお話いただきました。



企画展示室に鈴木尚典元選手が!

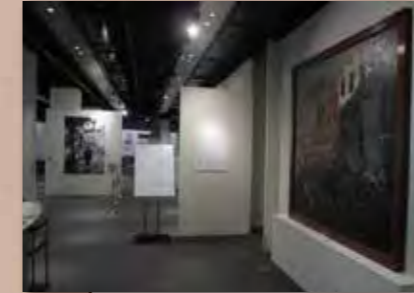


中庭ではストラックアウト

2013年7月13日(土)~10月14日(月) 開館10周年記念 特別展 「関東大震災90周年 関東大震災と横浜 —廃墟から復興まで—」



2013年は、1923(大正12)年の関東大震災から90年目の年でもあり、当館・横浜開港資料館・横浜市史資料室の3施設が連携して、関東大震災90周年の記念展示を同時開催しました。当館はメイン会場として、関東大震災の発生から復興にいたる大きな流れがわかる構成としました。あわせて「11から今 復興への願い」と題して、2011年に発生した東日本大震災関連の写真展を開催しました。会期中の夏まつりでは、中消防署の起震車が中庭に登場。実際に関東大震災の揺れを体験していただきました。



徳永柳洲画《横浜の全壊》(右)



関東大震災の揺れを実体験

2014年

2014年1月25日(土)~4月13日(日) 開館10周年記念 特別展 「港をめぐる二都物語 —江戸東京と横浜—」



年が変わった特別展「港をめぐる二都物語」は、横浜にとつてアイデンティティともいえる港の歴史を、東京との二都市間の関係から読み解く、新しい切り口の展示でした。関連イベントで実施した「ポートツアー」ポートめぐると「二つの港」にはたくさんの方をいただき、悪天候にもめげずに「横浜コースの日は大雨で」、海上から二つの港の歴史をまなびました。



展示解説



ポートツアーでは東京湾をじっくりと

2015年

2015年4月25日(土)~6月28日(日) 特別展「時計屋さんの昭和日記 —青年のみた戦中戦後の横浜—」



戦後70年を迎えた2015年の特別展は、ひとりの青年の日記から戦中戦後の横浜のくらしと世相をたどった「時計屋さんの昭和日記」でした。市民の視点から横浜の歴史をストーリー仕立てで紹介する試みは、歴史をより身近に感じられるとして、来館者から高い評価の声をいただきました。ストーリーのもととなった下平家日記は、その後当館へ寄贈され、昭和期の生活史資料として、現在も研究が続けられています。



日記を読み解く連続講座

2014年10月11日(日)~2015年1月12日(月) 特別展「あこがれの「団地」 —高度成長とベッドタウン横浜—」



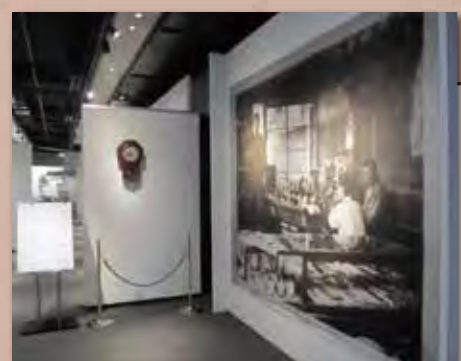
2014年は、1964(昭和39)年の東京オリンピックから半世紀。秋の特別展では、東京のベッドタウンとして急激な宅地化がすすむ高度成長期の横浜を「団地」とその暮らしに注目して紹介しました。関連イベントでは、ミュージアム・シアター・ワークショップ(MTW)によるミニ劇場「昭和の団地スケッチ」を開催。ある団地に暮らす一家を寸劇で描きながら、会場の皆さんと一緒に団地の思い出を語り合いました。



なつかしの生活道具も今では歴史資料



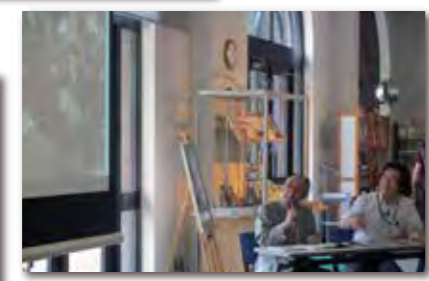
ミニ劇場「昭和の団地スケッチ」



展示の舞台となったのは磯子の時計店



エントランスには五十嵐写真をモチーフにしたインスタレーション



五十嵐英壽氏を迎えるトークイベント

2014年7月19日(土)~9月23日(火) 五十嵐英壽写真展 「写真記者」が見つめた港の半世紀



神奈川県新聞社に長く勤められたカメラマン五十嵐英壽氏からの写真寄贈を受けて開催した写真展です。戦後復興から平成の横浜博覧会まで、「写真記者」としての視点で切り取られた五十嵐写真をもとに横浜の戦後史をふり返りました。関連ワークショップでは、五十嵐氏が写した昭和の横浜を探しに、カメラ片手に港へ。五十嵐写真から生まれたもうひとつの写真展「ハマねこ」も大好評でした。



写真展「ハマねこ」

2015年7月18日(土)~9月23日(水)
横浜市ふるさと歴史財団8施設連携展示
「ハマを駆ける
—クルマが広げた人の交流 昭和編—」



2015年のもうひとつの目玉は、財団の8施設を会場として開催した連携展示「ヨコハマ3万年の交流」でした。当館と横浜開港資料館では「ハマを駆ける—クルマが広げた人の交流」と題して、近代の交通手段である自動車の普及により、横浜の都市や社会がどのように変化していったのかを紹介しました。日産自動車と共催した「日産わくわくエコスクール」や、横浜郷土史団体連絡協議会との共催シンポジウム「ハマの轍」など、関連イベントも盛りだくさんでした。



展示室入口には
シェル石油の
ガソリンポンプ



横浜開港資料館で開催されたシンポジウム

2016年4月16日(土)~7月3日(日)
企画展「横浜・山下公園
—海辺に刻まれた街の記憶—」



春の企画展では、誰もが知っている横浜の観光名所「山下公園」を取り上げ、関東大震災の瓦礫処理で誕生した山下公園が、人びとのための憩いのウォーターフロントとして整備されていく歴史を紹介しました。関連イベントでは、横浜シティガイド協会と共催してガイドツアー「山下公園のヒミツを探れ!」を開催したほか、子どもたちにアニメーションで「未来の山下公園」を描いてもらい、展示のエピソードとして上映しました。



公園誕生の経緯が綴られた
貴重な文書を初公開



アニメーションを
作成してくれた
子どもたち
(協力:
Marble
Workshop)

2016年10月22日(土)~2017年1月15日(日)
企画展「焼け跡に手を差しのべて
—戦後復興と救済の軌跡—」



秋の企画展では、これまで光が当てられてこなかった横浜の戦後史の側面として、引揚者や被災者、戦争孤児などの戦争被害者に対して、救済の手を差しのべた横浜の人びとの取り組みを紹介しました。毎年秋の時期は市内の小学校4年生の団体見学が多いのですが、このときは平和教育の一環として、小学校6年生の見学も相次ぎました。



戦後の
記録映像を使っ
ての
深読み講座



小学校
6年生への
展示解説

2017年1月28日(土)~4月9日(日)
増田彰久写真展
「アジアの近代建築遺産
—上海・青島・北京・大連・長春—」



横浜ユーラシア文化館の主催、当館の共催で開催した建築写真展。建築史家の藤森照信氏を中心とした建築調査にともない、写真家増田彰久氏が30年にわたって撮り続けてきた中国諸都市の近代建築を紹介しました。関連講演会では、藤森氏による基調講演「中国の近代建築」に続いて、藤森・増田両氏による対談形式にて中国での撮影秘話をたっぷりとうかがいました。



増田彰久氏による作品解説



ユーラシア大陸を
描いて西洋館の
伝播を説明する
藤森照信氏

2017年4月22日(土)~7月2日(日)
企画展「ようこそ! 横浜地図ワールドへ
—まちの移りかわりが見えてくる—」



2017年の春は、当館横浜開港資料館・横浜市史料室の連携展示として、人気の高い地図を展示の素材として取り上げ、各施設がそれぞれのテーマで企画展を開催しました。当館では横浜に関する地図を網羅的に取り上げ、地図そのものの魅力をたっぷり味わっていただき、またワークショップ「地図で遊ぼう!」では、地図に親しんでいただけるよう、来場者にお住まいの場所をシールで示してもらいました。

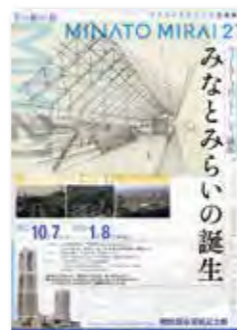


展示解説は
いつも大人気



皆さんの
お住まいは
どこ?

2017年10月7日(日)~2018年1月8日(月)
企画展「ウォーターフロント・シティ横浜
みなとみらいの誕生」



秋の企画展では、横浜のウォーターフロント開発を代表するみなとみらい21地区を取り上げました。ドックが建設された明治時代からの長い前史をふまえ、1965(昭和40)年に横浜市の六大事業として構想が発表され、「みなとみらい21」として始動するまでのあゆみを紹介しました。関連イベントでは、恒例になりつつある歴史クルーズ。象の鼻からみなとみらいまで、ボートに乗って横浜港の歴史をめぐる予定です。



展示風景



海面が近いのが
クルーズの魅力



奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる

昭和20年(1945)の敗戦後、横浜は沖繩を除く日本全土の連合国軍地上部隊を統括する米第8軍の司令部が置かれ、都心部や港湾施設をはじめ、本牧・小港・根岸地域などが広範囲に接収されることになった。関内や関外地域には、占領軍兵士の兵舎が広範囲に設置され、伊勢佐木町など、戦前の繁華街は兵士たちが闊歩する街となる。この時期の横浜を多く撮影した奥村泰宏氏(1914-1995)と常盤とよ子氏(1928-)夫



① ボーイズホームの子どもたち
1950(昭和25)年 奥村泰宏氏撮影 当館所蔵

妻の資料が本年、常盤氏の姪にあたる栗林阿裕子氏を通じて当館に寄贈されることになった。本稿では両氏の業績と写真の特徴について言及したい。

■奥村泰宏氏の業績

奥村氏は1914(大正3)年に横浜の老舗燃料商、奥村商会の家に生まれ、1937(昭和12)年にカメラと出会い、生涯を通じて撮影活動に取り組みことになる。撮影を開始した当初は、奥村氏のテーマは絵葉書のような風景や、女性モデルなどであったが、1941(昭和16)年頃から戦争の影響で写真家活動を一時中断する。また、1945(昭和20)年5月29日の横浜大空襲でそれまでの作品や暗室など一切を焼失したほか、家業も石炭の統制のために活動が制限されることになる。

敗戦後、奥村氏は戦災者・引揚者・戦争孤児・「浮浪児」など、戦争被害を受けた人々を保護する目的で、横浜市戦災者同盟という組織の主要メンバーとなり、これらの人々を救済するために食料・物資の供

給や住居の斡旋を行うなど、様々な社会事業の取り組みに従事することになる。横浜市戦災者同盟は、1947(昭和22)年に社団法人日本厚生団へと改組し、奥村氏は専務理事に就任して活動を継続する。同団の多岐にわたる仕事の中でも特に顕著な業績が、戦争孤児「浮浪児」を保護したボーイズホームの設立であった。

奥村氏は写真雑誌『フォトアート』(第3巻、第1号、1951年1月)で同ホームの写真(①)を投稿し、次のように記している。
——浮浪児達が、このボーイズ・ホームに救われてからもう三年になります。このホームの特長は、ヨコハマの浮浪児の巢である野毛の町の中に建られていることです。収容するとすぐ又脱出してしまふ浮浪児達。それをあやつる街のボス。しかしそれらの事も一切解決されて、今では嬉々として毎日学校へ通っています。此処の創立者の一人である私は、ことも違がもつともつと幸福になれる日の来るのを常に願っています。——

この文章からは、奥村氏が戦争孤児や「浮浪児」の子どもたちのために親身になって、その保護に努めていたことがうかがえる。奥村氏は石炭の統制が解除される1949(昭和24)年まで社会事業に従事している。

この文章からは、奥村氏が戦争孤児や「浮浪児」の子どもたちのために親身になって、その保護に努めていたことがうかがえる。奥村氏は石炭の統制が解除される1949(昭和24)年まで社会事業に従事している。

事し、その後は家業に戻ったが、日本厚生団の理事の任は解かれず、その役割を果たし続けた。

奥村氏が写真家活動を再開させるきっかけとなったのは、1949(昭和24)年に横浜で開催された日本貿易博覧会の際に行われた撮影会に参加したことで、このとき平和が訪れたことを実感し、仕事の合間を見て横浜の街の撮影を行うようになる。奥村氏は社会事業に携わった経験から、戦前のような花鳥風月をテーマとした作品を撮る気にはならず、現実のヨコハマを撮影しようと考え、職にあぶれた「風太郎」や、「浮浪児」、「混血孤児」など、戦後混乱期を象徴する人々の姿を多く撮影した。また、街に溢れる占領軍兵士の姿も奥村写真の重要なテーマであり、当初は警戒をして隠し撮りで撮影を行っていたが、後に積極的に彼らに声を掛けながら撮影を行うスタンスへ変更し、彼らの生き生きとした表情を捉えることに成功している(②)。奥村氏はこのような写真の評価に加え、数々の写真家団体の結成や後身の育成につとめた功績が高く評価され、横浜市功労者表彰(1980「昭和55」年)や横浜文化賞(1984「昭和59」年)を市から授与されている。



② 太った兵隊 伊勢佐木町
1952(昭和27)年 奥村泰宏氏撮影 当館所蔵

■常盤とよ子氏の業績

常盤氏は1928(昭和3)年に神奈川県川崎市の酒問屋の家に生まれ、裕福な家庭環境で少女時代を過ごしたが、横浜大空襲で父を亡くす悲劇を体験する。その後、東京家政学院を卒業し、兄のラジオ放送事業を手伝いアナウンサーとして活動するが、1951(昭和26)年頃に奥村氏と出会って写真家の道を志すことになる。

常盤氏が写真家活動を開始した当初のテーマは、横浜港に集う人々の情景で、別れや出会いの場面を多く撮影した。その後、1956(昭和31)年に、社会に進出し始めた女性達の姿に着目した二連の作品を、個展「働く女性」で発表したところ、高い評価を受け、世間の注目を集めるこ



③ キャバレー・サクラポートの楽屋
1955(昭和30)年 常盤とよ子氏撮影 当館所蔵

とになる。常盤氏の撮影対象となったのは、美容師や看護師、ファッションモデルなど、日の当たる場所で働く女性たちのほか、夜の街で働くダンサーやヌードモデル、女子プロレスラー(③)などで、当時偏見の目でみられた職業の女性達も取り上げたことが特徴であった。この個展で最も多くの注目を集めたのが、真金町の赤線地帯を撮影した作品群であった。赤線とはGHQによる公娼廃止指令(1946「昭和21」年)から、売春防止法の施行後の1958(昭和33)年までの間に非公認で売春が行われた地域を指す言葉で、横浜市内では戦前に遊郭が存在した南区の真

金町・永楽町周辺に赤線が存在していた。常盤氏は1953(昭和28)年頃からこの地域の撮影を開始し、当初は隠し撮りでこの地域を撮影していたが、そこで働く女性達に声を掛けながら撮影をする方法へと手法を変え、彼女たちの日常を世に伝える作品を多く生み出した(④、⑤)。また、1957(昭和32)年に赤線や、伊勢佐木町周辺で非公認の売春を行う女性たちの姿を撮影した作品を収録した写真集「セイセイ集」危険な毒花」が刊行されると、全国的な注目を集めることになり、戦後女性写真家を代表する一人として連日メディアに取り上げられることになる。二連の作品は、売春防止法の施行で消滅する直前の戦後横浜の赤線地帯を記録した他に類を見ないものであり、東京都写真美術館や横浜美術館などにも所蔵されている。常盤氏は奥村氏が逝去した後、その跡を継いで神奈川県写真作家協会会長や神奈川県写真クラブの発展と後進の育成に尽力した。こうした長年の功績に対し横浜文化賞(2003「平成15」年)、文化長官賞(2004「平成16」年)、神奈川文化賞(2014「平成26」

年)が授与されている。奥村・常盤両氏の撮影した写真は、戦後の横浜に生きる人々の諸相を克明に記録したものであり、芸術的価値のみならず、資料的価値が極めて高いものであるといえる。当館では企画展「奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる」(会期:2018年10月6日~12月24日)の開催を契機とし、今後も継続して資料の調査に取り組み、両氏の写真を後世に伝えるべく予定である。

(西村 健)



④ 赤線地帯を撮影する常盤氏
1957(昭和32)年 奥村泰宏氏撮影 当館所蔵

⑤ 流行歌の合唱
1954(昭和29)年 常盤とよ子氏撮影 当館所蔵

余話 展示

鶴見の鉄道

このたび当館では「伸びる鉄道、広がる道路、横浜をめぐる交通網」と題して、横浜の交通インフラとそのネットワークの歴史を紹介する企画展を実施した(4月14日〜7月1日)。その観覧者の感想にあったのが、鶴見駅や鶴見線などについてもっと取り上げて欲しいという声だった。鶴見という地域は横浜市内だが、自立した別個の都市の様相もあり、また川崎との地理的、経済的な結びつきが強い。そこで展示余話では、改めて鶴見の鉄道について、一部に川崎も含めながらその歴史を概観してみたい。

まず1872(明治5)年、東京(新橋)―横浜間に日本で最初の鉄道が国営で創業する。線路は旧東海道に沿って単線で敷設され、途中に品川・川崎・鶴見・神奈川の四つの停車場(駅)が設置された。鶴見以外は江戸時代の宿場に対応しているが、鶴見は武蔵国橋本郡の東海道沿いにあった村落で、宿場ではなかった(ただし、付近を流れる鶴見川が水運に利用された)。線路は1881(明治14)年に複線化され、やがて終点の横浜から神戸まで延伸されて「東海道本線」となる。

次に鶴見周辺に新しく鉄道が登場するのは、20世紀に入った明治末期から大正時代のことである。1905(明治38)年、民間の京浜電気鉄道(現京急電鉄)が品川(現北品川)―神奈川を全通させた。一部区間は東海道(国道1号)の路上を走る路面電車軌道だが、日本で最初の都市間(郊外)電車となった。途中には川崎・市場・鶴見・生麦・子安などの停留所が設けられた。やがて新子安(1910年)や八丁畷(1916年)、沿線にできた寺院や遊園地に対応して総

持寺(1911年、現在廃止)、花月園前(1914年)などの停留場も追加された。そして、生麦の停留場前では住宅地の分譲も開始した(1914年)。

京浜電気鉄道は、既にある東海道本線(国有鉄道)の蒸気列車(汽車)と競合し、運転本数や停留場の多さなどの利便性から多くの旅客を奪った。しかし、国有鉄道も1915(大正4)年、京浜間の線路を複数線(4線)化し、従来の汽車に並んで大型で高速の電車を走らせて対抗した。いわゆる京浜線(東京―横浜―桜木町、後の京浜東北線)である。汽車は横浜以遠へ向かう中長距離列車だけとなり、品川から横浜まで無停車となった。以来、鶴見などの途中の各駅は近距離電車(京浜東北線)だけの停車場となった。もともと貨物列車は発着し、鶴見駅は翌々年に高島貨物駅や新港ふ頭(横浜港駅)へ向かう臨港貨物線の分岐駅となっている。



①「東海道線旅行図絵」(本文)
1907(明治40)年、田山花袋・他著、修文館発行、当館所蔵
明治時代の東海道本線の沿線を案内する出版物より、川崎・鶴見付近の様子を描いた頁。川崎の宿場町を除くと、周辺には農漁村と砂浜、田畑や山林の風景が広がっていた。

さて、多摩川と鶴見川の河口にはさまざまな川崎・鶴見の海浜は、明治時代には郊外の遊覧地として注目されたが、大正時代になると遠浅の沖合に浅野財閥(浅野総一郎)による埋立地が竣工し、臨海工業地帯への変容が始まった。工場への輸送機関としてまず1918(大正7)年、川崎駅から浜川崎駅まで貨物線(国有鉄道)が開通し、1926(大正15)年には浜川崎駅から弁天橋駅まで鶴見臨港鉄道(貨物専用)も開通する。一方、旅客用に登場したのが京浜電気鉄道の子会社の海岸電気軌道(1925年、総持寺―大師間開通)で、路面電車だった。

1930(昭和5)年、鶴見臨港鉄道は増加した工場労働者の通勤輸送を開始する。弁天橋駅から東海道本線(京浜東北線)の鶴見駅へ線路を伸ばし、電化をして鶴見―弁天橋―渡田(浜川崎)―扇町で電車を運行した。並行路線となった海岸電気軌道も同年に買収し、自社の軌道線として営業を継続するが、1937(昭和12)年にこちらは廃止した(軌道の跡地は産業道路となる)。同じ頃に南武鉄道も開通し(1927年、川崎―登戸間開通)、尻手、矢



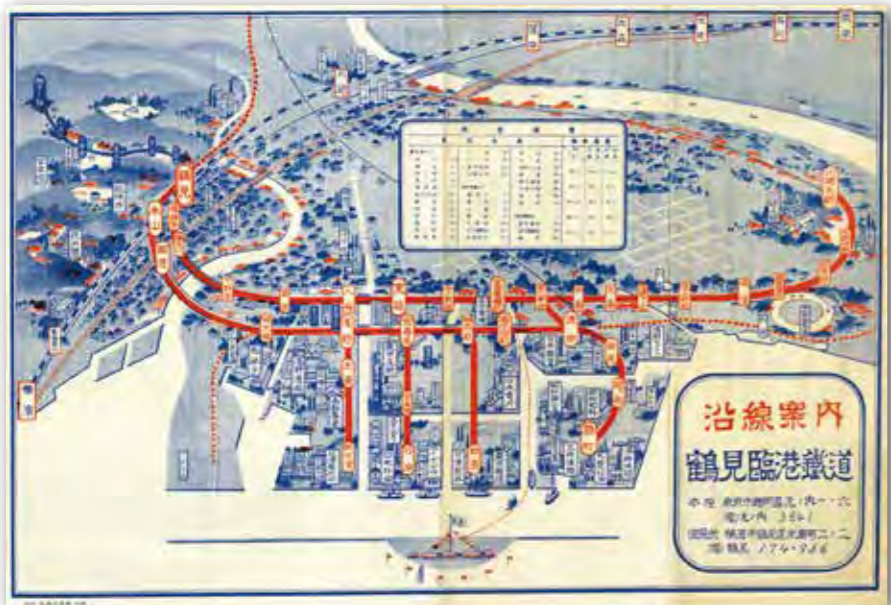
②「京浜電鉄・海岸電軌沿線名所案内」(部分)
1925(大正14)年頃、京浜電気鉄道株式会社・海岸電気軌道株式会社発行、当館所蔵
京浜電気鉄道は、川崎の町と大師を結んだ大師電気鉄道を起源とする。総持寺と大師を結ぶ路線もその支線として計画されたが、予定通りに進捗せず、子会社の海岸電気軌道として開業した。しかし、沿線は未開発の土地が多く、経営は芳しくなかった。



③「京浜電鉄川崎住宅地明細図」
1926(大正15)年頃、京浜電気鉄道株式会社発行、当館所蔵
現在の川崎区京町と鶴見区平安町の市境付近に、同社によって開発された住宅地があった。当初は工場団地として計画されたため、中央部には運河が配置されている。八丁畷駅とこの住宅地の間に、京浜電気鉄道として最初の路線バスが走り始めた(1927年)。

電車)に転換され、その代替として1970年代に大井ふ頭より塩浜・浜川崎、そして鶴見を経て地下線で羽沢・戸塚方面へ向かう新たな貨物線が建設された。鶴見駅は通勤駅であるとともに、東海道と横浜港、そして工業地帯へ向かう貨物鉄道が縦横に交差するジャンクションとなつて今日に至っている。

(岡田 直)



④「沿線案内・鶴見臨港鉄道」
1935(昭和10)年頃、当館所蔵
鉄道(貨物・旅客)と軌道(路面電車)、バス(鶴見―獅子ヶ谷)の路線が描かれた、鶴見臨港鉄道の最盛期の案内図である。すでに埋立地には鉄鋼、機械、造船、石油、セメントなどの工場が立ち並び、一方、その沖にある扇島には海水浴場も開かれ、遊覧船が運航されている。